

10・雨、迷子、バス停、キス

『09・町に一個しかないショッピングセンターで買い物デート』から数十分後。
とある年の夏。七月二十九日（水）十五時ごろ。

日本とある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は雨。気温は二十五度程度。

雨によって気温は下がったが、その分湿度が上がってきた。

場所は、ショッピングセンターからだいぶ離れたところにあるバス停。

主人公と弥映は、あの後、ショッピングセンター前から二つ離れたバス停を目指して歩いた。

距離としては、歩いて十分程度の想定だった。

それ位ならいい散歩になるし、一緒に緑の中を歩いて楽しいだろうと思ったのだ。

だが、途中で道に自信がなくなった。

思えば、主人公はここで己の非力さを認めて、おとなしくスマホの地図を見るべきだった。

素直に『道がわからなくなった』と言って、弥映に助けを求めればよかった。

でも主人公の『先ほどの男性に負けたくない』というつまらないプライドが、それをさせなかった。

弥映もまた、そんな主人公の気持ちを察していたのだろう。

あるいは、こうなったのは自分のせいだと考えていたのだろう。

『一回スマホ見た方がいいんじゃない？』とか『同じところに戻ってきちゃってない？』とか。

そういった事は一切言わず、黙ってついてきてくれた。

こうして主人公は意地を張り続け、二人は道に迷った。

その結果、想定しているバス停からも、その前後の停留所からも遠い位置に入り込んでしまったのだった。

おまけに、ここで雨が降ってくる。

そこからどうにか立て直して、なんとかバス停に着いた頃には、主人公も、弥映も、び

しよ濡れになっていたのである。

SE1 雨の環境音

【最初から最後まで流す】

【トラック終了まで繰り返し流す】

【0―10秒ほどまで流してからセリフ】

●中央 少しだけ左寄り

「少し恨みがましく。」

『天気予報は一日晴れだったのに』という意味で言っている」
予報、晴れだったのに。

【少し間をあけてから。主人公を心配して】
大丈夫？ 寒くない？ 濡れたよね」

〈主人公〉

「……大丈夫」

●中央 少しだけ左寄り

「少しホツとするが、
内心『こんなに濡れたのに、平気なはずはないだろう。申し訳ない』と思っている」
よかった」

〈主人公〉

「弥映ちゃんこそ、平気？」

●中央 少しだけ左寄り

「明るく。平気な事をアピールしたい。だが、実際はぐしよ濡れである」
あたしは平気。

【少し間をあけてから】

まさか、こんな降られるなんて思わなかったよねえ。

【先ほど見た時刻表を思い出して】

バス来るまで後三十分か。

まだちよつとあるね」

〈主人公〉

「ごめん……。私が、遠回りして別のバス停から帰ろうなんて言ったから」

●中央 少しでも左寄り

「少しも怒っていない。『むしろその提案が嬉しかった』と思っている」
ううん。あんたのせいじゃないよ。

【なので、自分の問題行動について反省する】

『こっちの道行ってみよう』とか、適当言ったあたしが悪い」

主人公と弥映、お互いに謝罪するが、場の雰囲気はあまりよくなならない。
二人とも疲れている。

暑い中、よく知らない道を不安なまま歩き続けるのは、想像以上に体力を使ったのだ。

さらに、この雨と湿気である。

明るい気分になれないのは、もはや自然な事だった。

●中央 少しでも左寄り

「話を明るい雰囲気に戻そうとする。

※マークまで、現状のいい点を述べる」

それでも、バス停見つかって安心したよね？

こういう小さい待合所って、すごい田舎〜っていうか。
風情（ふぜい）ある〜って感じ」※

主人公、そんな弥映の心遣いを嬉しく思いつつも、痛々しくも思う。

『もしかするとこの人は、いつもこのように生きているのかもしれない』と、気づいてしまったからだ。

弥映は主人公と出会う前から、今のように、自分に悪いところはないのに謝って、場の雰囲気と和ませようと道化になって。

自分を犠牲にする事で、その場を取り繕っていたのかもしれないと。

主人公は、そんな弥映を見たくはなかった。

弥映はいつもニコニコして、自分に甘えてきたり、からかってきたりして。何かあっても『主人公が全部解決してくれるはずだ』と楽観的にしている。

せめて自分の前では、いつもそんな風にしていて欲しかった。

だが、こんな現状を招いたのは、紛れもなく主人公自身だ。

だから、ただただ申し訳なくて、情けなくて。いたたまれなくて、泣き出したくなる。

それでも、せめて、濡れてしまった弥映の服だけは何とかしたかった。

主人公、鞆のジッパーを開けると、常備している防寒用のパーカーを取り出す。主人公にとっては少し大きめのサイズだから、弥映も問題なく着られるだろう。

SE2 主人公が鞆のジッパーを開ける音

【最初から最後まで流す】

SE3 主人公が鞆をあさる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……あの、弥映ちゃん。これ着て」

だが弥映は、ふいに差し出されたパーカーを見て驚いている。

主人公が、自分用の飲み物でも取り出すのかと思っていたようだ。

●中央 少しだけ左寄り

「きよんとんとして。まさか、上着が出てくるとは思っていなかった。

同時に、主人公の鞆が大きい事に納得する」

ん？

【少し間をあけてから。事態を理解するのが遅れる。

とても嬉しいが、申し訳ない。主人公が着るべきだと思っている】

え。これ、貸してくれるの？

ダメだよ。あんたの持ち物なんだから、あんたが着なよ」

主人公、弥映の反応を想定内に感じる。

だが、主人公には、弥映に上着を着てもらわなくてはならない理由があった。

〈主人公〉

「……透けてるから」

●中央　少しだけ左寄り

「きちんと聞き取れなかった。

主人公が何を言いたいのかわからない」

え？」

〈主人公〉

「……下着」

●中央 少しだけ左寄り

「ようやく主人公の意図を理解する。すごく恥ずかしい。」

薄々透けているだろう事は理解していたが、前側を腕で隠していればいいと思っていた」
あっ……!?!」

〈主人公〉

「前より背中が……なんだよね。見えちゃうから、着てほしい」

●中央 少しだけ左寄り

「『透けてる』という単語を言うのも恥ずかしい」
透け、てる。

「すごく恥ずかしい。笑ってごまかそうとすることができない」
……そっか。

「少し間をあけてから。とても申し訳なく思う」
……ごめん。目立つよね。

「少し間をあけてから。同時に、主人公の気づかいがとても嬉しい」

ありがとうございます。お借りします」

主人公が指摘すると、弥映は真っ赤になって身体を縮こませ、途端に居心地悪そうにする。

その仕草はあまりにも不憫で、主人公は胸が痛くなる。

こうなったのは、すべて自分のせいだ。

ますます自信喪失して、もう弥映の顔を見る事すらできなくなる。それでも、弥映は主人公に優しくかった。

●中央 少しだけ左寄り

「心から主人公に感謝する」

あんたってすごいね。

なんか荷物でかいなと思ったら、上着持って歩いてるなんて。

【ほめつつも、少し声が暗い。内心『それに比べて自分は……』と思っている】
さすが、あたしの彼女は違うな」

〈主人公〉

「そんな大した事じゃないよ……。いつも持って歩いてるだけ」

——だけど、もう褒め言葉すら、無理のある励ましに聞こえて、素直に受け取れない……。

主人公、弥映の顔を見られないまま返事をする。
よくない態度だとわかっていたが、それでも改められなかった。

●中央 少しだけ左寄り

「ほめつつも、少し声が暗い。」

主人公の表情が暗い事を理解している」
ううん。そんな事ない。すごいよ。

【少し泣きそうになって。

それでも、自分を大切にしてくれる主人公への想いが強まる】

……あたし、こんなに大事にされるの、初めて。

【恥ずかしそうに。だが、やはり少し声は暗い】

なんか、照れるね……」

〈主人公〉

「……………」

十秒ほど沈黙。雨の音だけを流す。

『あれ、なかなか次のセリフがないな』と、聞き手を不安にさせる程度に沈黙を続ける。

主人公、次の言葉を探したが、なかなか見つけれない。

また、弥映の言葉を信じる気にもなれなかった。

美人で、周囲の注目を集めて、その気になればいくらでもよい相手と交際できそうな弥映が、寒い日に上着を借りた事もない。そんな事は考えにくかったからだ。

だから、こんな風に考えてしまう。

……きっと弥映は、自分を励ますために嘘をついているのだ。

つまり、嘘をつかせるような事を、自分はしたのだ。

こんな自分が、なぜ今弥映の隣にいるのか、いよいよわからなくなってしまった……。

と。

〈主人公〉

「……嘘、言わなくていいよ。

無理に励ましてくれなくたって平気」

●中央 少しでも左寄り

「きよんととして。なぜ主人公がそんな事を言い出すのかわからない」
うん？」

〈主人公〉

「……わかるよ。本当はこういう事、され慣れてるんだよね？」

弥映ちゃんはこれまで……。

もっと案内とかエスコートとかうまくて、大人な人と、一杯デートしてるんだよね。
……ごめんね私、そういう風になれなくて。がっかり、したよね？」

……ああ、何を言っているんだろう。

こんなの、何の根拠もない妄想なのに。

主人公、言った瞬間『しまった』と思うが、すでに遅かった。

これでは『そんな事ないよ』と言ってももらえるのを待っているのと同じだ。散々失敗しておいて、それを謝るところか、さらなる慰めを求めている。

一体自分は、どれだけ幼稚なのだろう。

恥ずかしくて、今すぐここから消えてしまいたくなる。

だが弥映は、それに呆れるどころか、なおも主人公を心配しているようだった。

●中央 少しでも左寄り

「優しい声で。」

主人公が自分の言葉を嘘だと思っているらしい事と、失敗に深く落ち込んでいる事を理解する。

だが、とても咎める気にはならない」

……どうしたの？ 急に」

〈主人公〉

「……ほんと、ごめんなさい……」

十秒ほど沈黙。雨の音だけを流す。

『あれ、なかなか次のセリフがないな』と、聞き手を不安にさせる程度に沈黙を続ける。

主人公、そう言うと、鞆を抱きしめてうつむく。

何か明るい事を言って、どうにか軌道修正したかったが、無理だった。

今日は楽しい一日になるはずだったのに、最後の最後でめちやくちやにってしまった。こんな自分では弥映に呆れられてしまう。飽きられてしまう。

そう思うと、声が出なくなってしまう。

●中央 少しでも左寄り

「優しい声で。主人公の気持ちを最大限慮って」

なんで、謝るの？」

〈主人公〉

「……だって……」

十秒ほど沈黙。雨の音だけを流す。

『あれ、なかなか次のセリフがないな』と、聞き手を不安にさせる程度に沈黙を続ける。

●中央 少しだけ左寄り

「息づかいだけで表現する。

息を吸い込む。言葉をかけるタイミングを選んでいる」

……………」

〈主人公〉

「…………私、こんなんじゃない……」

十秒ほど沈黙。雨の音だけを流す。

『あれ、なかなか次のセリフがないな』と、聞き手を不安にさせる程度に沈黙を続ける。

主人公、次の言葉を見つけられず、泣きそうに息を吐きながら、また黙り込む。そのまま沈黙が続きそうになるが、ここで弥映が口を開いた。

●中央 少しだけ左寄り

「優しい声で。主人公の気持ちを最大限慮って」

いいんだよ。いつも、かっこよくなくても」

〈主人公〉

「え……？」

主人公、今にも泣き出しそうな顔で弥映を見上げる。
すると弥映は優しくこちらを見つめていて、本当に泣いてしまいそうになった。

●中央 少しでも左寄り

「できるだけ明るい声で。」

本当は弥映も決してテンションが高くはないが、主人公を励ましたい」
ほら、あんたって最初に会った日から、ずっと頼れて。

今も上着貸してくれてさ。

年下だけど『お姉ちゃん』って感じじゃん？

【少し間をあけてから】

だからさ。ちよつと変な言い方だけど。

【少し間をあけてから】

あんたにも、完璧じゃない時があるんだって。

【少し間をあけてから】

そう思うと、ちよつと安心するよ。

【少し間をあけてから】

あたしでも、あんたの力になれる事があるのかもしれないって思えるから。

【※マークまで、できるだけ明るい声で。主人公を励ましたい】

そもそも、主に悪いの、あたしだし。

あんたはあたしを助けようとしてくれて。ちょっと迷っただけなんだから。

『さっきの人に見つからないように帰ろう』って言うてくれて、嬉しかったよ?」※

〈主人公〉

「……でも……」

弥映の言葉は、どこまでも優しい。

だから主人公はそれを素直に受け入れて、安心してよかった。

なのに、なぜ『でも』と言ってしまったのか。

なぜ『励ましてくれてありがとう』と言って、この話題を終わりにできなかったのか。甘えすぎている自分につくづくうんざりしたが、もう止まらなかった。

もう自信がなくて、どうしても弥映に助けてほしくなっていたのだ。

●中央 少しだけ左寄り

「優しい声で。語尾が上がる。」

『まだ何か不安な事があるの?』と尋ねているような『うん……?』。

主人公の気持ちを最大限慮って」

うん……?」

〈主人公〉

「……でもっ……」

●中央 少しだけ左寄り

「優しい声で。続きを促す」

うん」

〈主人公〉

「……私もっと、格好よくなりたいのに。」

弥映ちゃんが自慢できる人になりたいのに……」

●中央 少しだけ左寄り

「息づかいだけで表現する。

少し驚いて。すごく嬉しい」

……………」

五秒ほど沈黙。雨の音だけを流す。

主人公が涙ながらに言う、弥映が息をのんだ。

それから少しの沈黙が続く、主人公は不安になる。

だって、今の自分は、あまりにも滑稽だった。

『今から変身ヒーローになる』とでも言っているような、無謀な感じ。聞いて思わず『なれっこないだろう』と、笑ってしまうような感じ。

だけど弥映は笑わなかった。それどころか、とても優しい声で言った。

●中央 少しでも左寄り

「少し間をあけてから。

すごく優しい声で」

あんたはとつくに。あたしの自慢の女の子だよ？」

主人公、今すぐ弥映に抱きつきたい衝動に駆られる。

弥映は、そんな主人公の気持ちを理解しているかのように、続ける。

弥映、近づいて、主人公の左耳に話しかける。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「少し間をあけてから。すごく優しい声で」
こっちおいで。

「少し間をあけてから。すごく優しい声で」
膝の上、乗って」※

〈主人公〉

「……………」

SE4 主人公が弥映の膝の上に乗る音
【最初から最後まで流す】

主人公、すがりつくように弥映に抱きつくと、指示された通り膝の上に乗って、ぎゅっとしがみつく。

これのどこが『格好いい』を目指している人の行動なのか、まるでわからない。それでも、もう止められなかった。

弥映の優しさが欲しかった。今すぐ弥映に優しくされて、安心したかった。

そんな主人公の背中を、弥映は優しく撫でてくれる。

SE5 弥映が主人公の背中を優しくとんとんする音

【最初から最後まで流す】

●中央 至近距離

「優しくあやすように」

ふふ。泣いてる。かわいいー」

主人公、泣きながら弥映に甘える。

〈主人公〉

「……だって……。こんな事になって。」

弥映ちゃん、私の事嫌にならない？

他の人の方がもつといいんじゃないかって、思わない？」

●中央 至近距離

「優しくゆっくりと。でも、はっきり否定する」

思わないよ。嫌になる訳ない。

【ひととき優しく】

あんたが好きだから、一緒にいるんだよ？」

〈主人公〉

「……ほんとに？　だって私、ずっと年下で。」

一緒に歩いてても、誰も恋人同士だと思ってくれない。

特に、なんかすごい事できるわけでもないし、お金をたくさん持ってるわけでもない……。

今日一日、私、そんな事ばかり気になって。

『弥映ちゃんには、もっと合う人がいるんじゃないか』って、思っちゃったの……」

一息に主人公が言うと、弥映が納得したような表情を浮かべた。
合点がいったように小さく頷き、それから柔らかに微笑む。

● 中央 至近距離

「優しく。ここでようやく、主人公がなぜ落ち込んでいるのか理解する。

主人公が嫉妬してくれている事が信じられないが、嬉しい」

ああ。

あんた。もしかして。

あたしが『さっきの人の方がいい』とか言って、ついてっちゃうとも思ったの?」

〈主人公〉

「そういうわけじゃないけど……」。

ああいう人の方が、その。一緒にいて、楽しいんじゃないかって思ったから……」

ああ、恥ずかしい。すべてバレてしまったようだ。

というか、何が『そういうわけじゃない』だろう。

『そういうわけ』だから、こんなに悲しくなったのに。

だけど弥映は追及しない。

信じられない事だが、主人公がこんな風にぐずぐずになって、不安を訴えている事自体を、とても嬉しい事と捉えているようだった。

主人公はてつきり、こんな自分を見せたら、嫌われてしまうかもしれないと思っていたのに……。

●中央 至近距離

「すごく嬉しい。」

主人公が嫉妬してくれた事が信じられなくて、胸がいっぱいになる」
ばかだね。

【優しい声でさらっと否定する。『そんな事はあり得ない』と思っている】
そんな訳ないじゃん。

【少し間をあけてから。

少し申し訳なさそうに】

そりや、あたし。

【少し申し訳なさそうに。

これが、主人公を不安にさせる理由になっている事はわかっている】
確かに軽い、って言うの？

【少し間をあけてから】

そういう風に思われる感じかもしれないけど。

【少し間をあけてから】

ほんとはいつも、なんか明るい感じのキャラ作って。それでなんとかしてるってだけ。

【『さつき』とは『男性に声をかけられた時』を表す】

さつきだって、普通に嫌だったよ？

『早くあんたに来てほしい』って、ずっと思ってた」

〈主人公〉

「でも私とは。私とは普通に、話してるじゃん」

弥映の言葉を信じられず、主人公がそうたずねると、弥映は『そういえば……』という感じで目を見開く。

弥映自身、それを不思議に思っているようだ。

弥映、言葉を選びながら話す。

● 中央 至近距離

「少し考えてから」

そうだね……。

【少し間をあけてから】

あんたと普通に話せるのは……。

【少し間をあけてから】

答えを見つけて、主人公への想いがさらに強まる】

あんたが優しいからだと思う。

【少し間をあけてから】

あんたといると、安心するからだと思う……。

【少し間をあけてから】

※マークまで、すごく優しく】

だからね。

あたし、あんたが思ってるよりもずっと、あんたが好きなんだよ。

他の人からそう見えなくなたって。あんたはあたしの、自慢の恋人なの。

ね？」※

〈主人公〉

「弥映ちゃん……！」

SE6 主人公が弥映に抱きつく音

【最初から最後まで流す】

主人公、弥映にしっかりと抱きつき、弥映は、主人公の左耳側から頭を出す形になる。

●左 至近距離

「すごく嬉しい。声が笑っている」

ふふふふ。よし、よし♥」

〈主人公〉

「あの……あの……」

●左 至近距離

「【すごく優しい声で。『どした』は『どうしたの？』の略】

うん？ どした」

主人公、一度身体を離すと、もう一度鞄を開け、今度は先ほど買った靴の袋を探す。

段取りはぐちゃぐちゃになってしまったが、今渡したかった。
喜んでもらえるかはわからないが……自分がどれだけ弥映を想っているか、今知ってほしかった。

SE7 主人公が鞆をあさる音2

【最初から最後まで流す】

主人公、鞆から袋を取り出すと、弥映に差し出す。

●中央 至近距離

「きよとんとして。自分へのプレゼントらしい事は理解するが、それ以上はわからない」
え……？

【少し間をあけてから。ドキドキしながら確認する】
これ……あたしに？

【少し間をあけてから。先ほど、戻るのが妙に遅かった理由を理解する】
まさか。さっきこれ買ってたから、遅かったの？」

〈主人公〉

「……うん。」

前にあげた靴は、彼女になる前のプレゼントだから。

今度は、恋人として、ちゃんと、プレゼントしたくて……買った。よかったら、受け取ってほしい……」

●中央 至近距離

「※マークまで、嬉しくて、声が震えながらゆっくり話す。

まさか、こんな事までしてくれているとは思っていなかった」

じゃあ。あんた。

さつき。あたしにプレゼントしてくれようとして。

なのに、戻ったらあたしがさっきの人といたから、怖くなっちゃったの？

『自分より、歳の近い男の人のいいかも』って思っちゃったの？※

〈主人公〉

「……うん。だから、さつきは変な事言った……。

本当にごめんなさい」

弥映、たまらなくなり、主人公の耳元へ顔寄せる。

弥映、主人公の左耳にささやく。

●●左 ささやく ※マークのセリフまでささやく

「泣きそうな声で。嬉しくてたまらない」

ばかだね……♡」

弥映、一度中央に戻り、主人公の正面に向き直ると、今度は真剣に感謝の気持ちを伝える。

●中央 至近距離

「優しく真剣な声で」

ううん。ごめんね。不安にさせたよね。

「少し間をあけてから。」

泣きそうな声で。すごく嬉しい」

こんなに一杯想ってくれて、ありがとう……。

「少し間をあけてから。ささやくように。」

箱の形や袋にある店名から、中身を察する」

これ、靴？

開けていい……？」

主人公が頷くと、弥映はすぐに開封を始める。

だけど主人公は、ここで再び不安になる。

弥映はこのプレゼントを見て、なんと言うのだろう。

『安っぽい』『自分の好みじゃない』そう思われたらどうしようと、とても怖くなる。だけど、それは杞憂だったようだ。

弥映は靴を取り出した途端、目を潤ませる。

SE8 弥映が包みを開ける音

【最初から最後まで流す】

●中央 至近距離

「嬉しくて息をのむ」

※あまり大げさにはならないようにお願いします※

……。

【すごく感動して。だが、しつとりと】

可愛い。

【少し間をあけてから。感動しつつもしつとりと】

もしかして。今着てる服に合わせて、探してくれたの？」

主人公、真っ赤になってうなずく。

〈主人公〉

「……うん。きつと、似合うと思って……」

●中央 至近距離

「【感激しつつもしつとりと。】

『絶対合う』は『絶対に今日のコーディネートと合う』という意味】
うん。絶対合うと思う。履いていい？」

弥映、言うと、主人公の言葉を待たずに主人公から一度離れる。
それから、靴を地面の、比較的濡れていないところを探して置く。
そして、すぐに履き始めた。

SE9 弥映が靴を履く音

【最初から最後まで流す】

ここで、靴を履こうと移動した事で、弥映の身体が中央の左寄りに戻る。

●中央 少しだけ左寄り

「感動しつっもしつとりと。」

主人公に靴を履いている自分を見せる」

ほら、見てよ。

【少し間をあけてから。

片足を軽く上げて、主人公に靴を見せているイメージ】

完璧。

【少し間をあけてから。

主人公が靴のサイズを把握していた事を思い出す】

そうだ。最初の日に教えてたね、靴のサイズ。

【少し間をあけてから】

そっか……これ靴に入ってたから、荷物でかかったんだ。

【少し間をあけてから】

ありがとう。ずっと大事に履くね。

【少し間をあけてから。

心底幸せそうに】

すごく、嬉しい」

〈主人公〉

「……へへ。喜んでもらえてよかった……」

主人公、大きな安堵感に包まれ、脱力する。

ようやく『自分は間違っていないかった』と思えて、ホッとしたのだ。

結局今回は、弥映の評価に依存してしまった。自分の意見を貫けなかった。

それはいい事ではないけれど……自信がないのは、今すぐに直せる事じゃない。それならせめて改善する意思を持って、そのための努力をし続けようと思った。

……これからも、本当に、弥映といられる人になるために。

一方、対する弥映は本当にとっても嬉しそうだ。

さつきからずっと、足を水たまりに触れないように小さく揺らしては、いつまでも靴の

造形と、それを履いた自分の足を、うつとりと眺めている。

その姿を見ていると、やっぱり主人公は、弥映のためなら、どんな事でもしたいと思う。そうは思っても実際はできない事ばかりだし、それに落ち込み傷つく事は、おそらくこれからもあるのだろう。

それでも、この温かい気持ちは何度でも湧いてくる。弥映の事が好きだと思う。彼女を幸せにしたい、彼女と幸せになりたいと、本気で思う。

●中央 少しだけ左寄り

「声がさっきよりも弾んでくる。ここから次第に、声が元のテンションに戻っていく。

主人公にこの幸せな気持ちを伝えたい」

喜ぶよ。喜ぶに決まってるじゃん。

好きな人からのサプライズプレゼントだよ？ 嬉しいに決まってる。

【少し間をあけてから。

心底幸せそうに】

本当にありがとう……」

〈主人公〉

「弥映ちゃん……」

ここで、主人公と弥映はお互いに見つめ合う形になり、聞こえ方は、中央に戻る。

二人、ようやく笑顔になり、弥映の声は明るくなっていく。

●中央

「【思い出したように】

てかさあ……。

【甘くからかう。普段の弥映に戻ったような感じで】

あんた、昨日人のおっぱい死ぬほど揉んだり吸ったりしといて、何不安になってんの？

【※マークまで、甘くかすれた声で。

ここでもうやく『疑われて悲しかった』という気持ちを少しでも表現できるようになる】

帰ったらさ。今日もするでしょ？

明日もするでしょ？

あたしと、付き合ってるんでしょ……？」※

拗ねたような弥映の声に、主人公は、胸をぎゅっとなつかまれたような気分になる。

かわいい。すごくかわいい。最高にかわいい……と思う。

それから、その通りだと思った。自分達は付き合っている。

誰も知らないけれど、毎晩、ちよつとありえない位いちやいちゃしているのだ。

〈主人公〉

「……うん。する。

めちやくちやする。

『いくらラブラブだからって、ここまで何回もしないでしょ』ってくらい、する」

弥映、再び主人公の左耳にささやく。

●●左 ささやく ※マークのセリフまでささやく

「※マークまで、甘えた、誘うような声で」

うん。しよ。

他の人とは、まず出来ないようなの。引く位やばいの、しよ？

【少し間をあけてから】

来てよ……。どうせバスまだ来ないし、他の人も来ないよ」※

主人公、弥映と見つめ合う。それから、キスをする。

●中央 至近距離

「唇に、軽く一回だけキスする」
ちゅ

弥映、主人公の左耳にささやく。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「少し間をあけてから。すごく優しい声で」

恋人同士のエロい事しよ」※

ここでフェードアウトして終了。